

血管透過性を標的とする 新戦略での疾患治療

オーガナイザー

岡田欣晃 (阪大院薬)
鈴木亮 (帝京大薬、帝京大先端総研)

血管は酸素や栄養を運搬するための単なる「チューブ」ではない。血管はその透過性をダイナミックに変化させることで、血液と臓器間の物質や細胞の移動を制御し、生体恒常性の維持や病態の発現に寄与している。例えば、脳血管の透過性は他の臓器の血管より低く保たれており、脳を異物侵入から守る役割を担う。

一方で、感染症・炎症性疾患、癌においては、血管透過性の過剰な亢進が

病態を悪化させる。このため血管透過性が調節される仕組みを理解し、その制御技術を開発すれば、新発想での疾患治療薬や薬物デリバリーが可能となる。

本シンポジウムでは、血管透過性制御分子の機能解析と制御薬開発への応用の研究、また、超音波やマイクロバブルを活用したユニークな透過性制御技術についての最新の知見を紹介する。血管透過性を標的とする新しい治療戦略が、感染症、炎症性疾患、脳疾患、癌など、多様な難治性疾患の治療への有用なアプローチとなり得ることを議論したい。(岡田欣晃)

地域と連携した薬学研究の取り組みと実践

オーガナイザー

吉山友二 (北里大薬)
飯塚敏美 (望星築地薬局)

急速な高齢化と医療の高度化に対応するためには、取り組みの質をさらに高め、幅広く実践していくことが求められる。外来から入院、在宅へ必要な医療を切れ目なく提供できる体制を地域全体で整備する必要があるが、多くの医療職が関わるため、治療の基本方針の明確化、円滑なコミュニケーション、患者情報の共有など、多くの課題を抱えている。

そこで求められるのは、共通の目的意識を持ち、各専門職がそれぞれの能力を発揮し、他者の持つ機能と調整し

ながら連携し、患者に総合的に効率良くきめ細かい良質な医療を受けてもらうことである。そのためには外来から入院、在宅とステージが変わっても、科学的根拠に基づいた医療を実践し、薬学を基盤としたチーム医療を病院の中だけでなく、住み慣れた地域に戻った後も継続して提供していく必要がある。

本シンポジウムでは地域と連携した薬学研究の取り組みと実践の現状を確認し、その中で今後の方向性について議論を深めたい。

本シンポジウムでの講演内容を、地域医療における薬物治療の実践に応用することが薬学関係者の腕の見せどころと確信する。(吉山友二)

環境・衛生部会シンポジウム

化学物質の毒性評価法開発における新展開

オーガナイザー

吉成浩一 (静岡県大薬)
中西剛 (岐阜大薬)

医薬品をはじめとする化学物質の毒性評価は主に動物実験の結果をもとに行われている。しかし、既存の評価系では必ずしも十分ではなく、現に医薬品開発においては、多くの非臨床試験や臨床試験が行われているにも関わらず、市販後に有害作用が原因で市場から撤退することもある。

さらに近年、製品開発の効率化や動物愛護の観点から動物実験代替法の開発が急務となっている。そのため、機

序を踏まえた評価が可能なモデル動物の開発や非哺乳動物試験系の開発、さらにはiPS細胞を用いたインビトロ試験系や化学構造に基づくインシリコ毒性予測手法の開発が盛んに行われている。

本シンポジウムでは、トランスジェニックマウスを用いたアンドロゲン関連毒性評価手法、ヒトiPS細胞を用いた発達神経毒性評価、ゼブラフィッシュの蛍光生体イメージングを用いた毒性評価ならびに化学構造情報を利用した肝毒性予測手法等の具体例を紹介する。

(吉成浩一)

国際交流シンポジウム 日本薬学会-FIPジョイントセッション2022

第1部:FIPフォーラム2022

オーガナイザー

熊本卓哉 (広島大院医系科学)
松岡一郎 (松山大薬)

FIP(世界薬学連合)は、薬学の実務、科学、教育の発展を通じて世界の健康の増進に貢献することを目標としている。2016年のFIP南京大会において、世界の医療従事者の変革に向けたPharmaceutical Workforce Development Goals(PWDGs)が設定された。20年には、これに薬学の実務と薬科学のメトリックスを加えた21のFIP Development Goals(FIP DGS)として発展し、さらにこのFIP DGSを実施するための世界的な

データハブとしてFIP Global Pharmacy Observatory(GPO)が開発された。

日本薬学会(PSJ)はFIPの団体会員であり、DGSへの取り組みとFIP GPOの支援のための重要なパートナーとなることが期待されている。そこで、日本薬学会とFIPが共同で企画したPSJ-FIPジョイントセッションでは、まず第1部となるFIPフォーラムにて、世界の健康増進に向けた日本薬学会の科学の側面からの貢献、FIP DGSについての解説と特にsustainable health careに向けたFIPの取り組み、さらには日本での薬学教育・研修の評価への適用について議論する。(熊本卓哉)

国際交流シンポジウム 日本薬学会-FIPジョイントセッション2022

第2部:アジア・太平洋からの 新しい薬科学者の息吹

オーガナイザー

松岡一郎 (松山大薬)
熊本卓哉 (広島大院医系科学)

FIPは、世界中から加盟する150以上の団体会員(MO)がFIP DGSをもとにそれぞれの地域において交流を深めつつ、薬学の実務、科学、教育の発展に貢献することを求めている。これに呼応して日本薬学会(PSJ)では、21のFIP DGSのうちDG1(Academic Capacity)とDG2(Early Career Training)に注目し、アジア太平

洋地域における薬科学振興と若手薬科学者の育成・交流を目的としたプログラムをFIPと共同で企画した。

PSJ-FIPジョイントセッションの第2部では、マレーシアの若手薬学教員、オーストラリアで活躍する若手日本人薬学研究者、および日本の薬学系大学院生を本セッションに招き、薬科学研究の発表と議論を通じて交流を深めていただく。今後、日本薬学会年会がアジア太平洋地域における若手薬科学者の育成と交流のハブとなることを期待している。(松岡一郎)

化粧品開発の現状と課題

オーガナイザー

五十嵐良明 (国立衛研)
秋山卓美 (国立衛研)

近年、新規有効成分を配合した医薬部外品(薬用化粧品)が承認申請される数は減少しているものの、天然植物成分を配合した化粧品は増加、シワ改善を謳う薬用化粧品の市場は世界的な活況を呈している。国内でこのシワ改善という新たな効能が承認に至った大きな要因は、そうした成分および製剤の有効性や安全性を正しく評価するガイドラインが確立されたことであり、規制と開発研究が人の利益と調和した

レギュラトリーサイエンスの成果と言える。

本シンポジウムでは、化粧品の規制、安全性評価法の現状、化粧品成分の皮膚透過性と製剤や使用方法との関係について、また、生菌を配合する新形態の製品に対する国際的議論、さらに化粧品の新規効能の獲得に向けた取り組みについて、産官学の先生方に講演いただく。紹介する情報が医薬品・化粧品メーカー、学識経験者、薬剤師、規制当局の間で共有され、これから先の機能的で安全・安心な化粧品の開発につながることを期待する。

(五十嵐良明)

地球の健康とすべての人々の健康で豊かな生活に貢献したい。それが私たちスズケンの壮大なテーマです。

スズケンの事業領域は、健康創造。医薬品流通業界のリーディングカンパニーとして医薬品・医療機器の供給をはじめ健康に関するあらゆる分野でお役に立てるプライム・ベンダーをめざしています。

SUZUKEN
https://www.suzuken.co.jp



Design Your Smile
健康創造のスズケングループ